

J-FUNの目指す「楽しい」難民支援



©UNHCR

UNHCRと難民支援に携わるNGOでつくる J-FUN (Japan Forum for UNHCR and NGOs-日本UNHCR・NGO評議会) が2006年6月に設立されて約2年半。この間、UNHCR議員連盟との会合を5回開催、UNHCR駐日事務所及びUNHCRユースと共に表参道での難民支援啓発イベント「表参道ジャック」を2回成功させ(P18-19参照)、企業とNGOの連携を進めるなど活発な活動を続けてきた。

J-FUN共同議長の橋本笙子ADRA Japan事業部長は「J-FUNという枠組みがあることでNGOの声が大きくなり、活動が取り上げられるようになってきた。NGOの期待も大きい」と手ごたえを感じている。

実はJ-FUNのFUNには、「楽しさ」という願いも込められている。「難民支援の現場は楽しいと表現されるような環境ではない。一般の人から見れば、自分とは関係ない遠い世界と思われがち。サッカーや料理や映画などを通じて誰でも気軽に難

民支援に触れられる枠組みが作りたかった」ともう一人の共同議長、岸守—UNHCR駐日副代表は言う。

難民支援の最前線で井戸を掘ったり、学校や病院を建てたりできるNGOは、特殊技術を持ったプロの集団だ。日本のNGOは支援の現場で信頼と実績を重ねつつあるが、日本社会における待遇やイメージ改善は追いついていない。

橋本共同議長は「一般の方たちを楽しく巻き込んで、日本発のユニークな人道支援につなげていければ」と今後の抱負を語った。J-FUNの挑戦は今始まったばかりだ。

詳細は www.j-fun.org



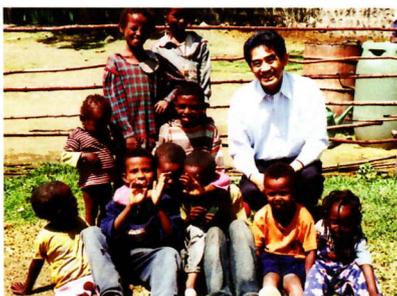
遠景近景

日本のNGOの体力強化を

UNHCR議員連盟の事務局長として過去6回にわたって、人道支援の現場でUNHCRとともに活動しているNGOの方々と人材育成や安全管理などのテーマについて意見交換をしてきました。

南部スーダンやアフガニスタンでの活動などで分かる通り、日本のNGOもかなり実力をつけてきました。しかし、欧米のNGOに比べるとまだ体制や体力の面で十分とは言えません。財政面の問題は深刻で、働き盛りの30代がNGOに残りたくても、待遇面で残れない状況があります。

過去にはアフリカや中東、アジアなどで難民キャンプを視察してきました。出身国への帰還、第三国定住などをさらに進めていかなければなりません。また難民キャンプへの支援も必要で、NGOの協力は必要不可欠です。今後も意見交換を基に、NGOの体力強化という課題に取り組んで行きたいと思えます。



逢沢一郎
衆議院議員、UNHCR議員連盟事務局長、元外務副大臣。
アフリカの難民キャンプに自ら足を運び、J-FUNとの対話でも国会議員側座長を務める。

